

高島屋史料館 TOKYO 企画展 Vol.1 「日本橋高島屋と村野藤吾」

セミナー 3

百貨店・日本橋・都市文化の過去と現在

吉見俊哉（社会学者・東京大学大学院教授）

対談＝**吉見俊哉**×**松隈洋**（建築史家・京都工芸繊維大学美術工芸資料館教授）

〔日時〕 2019年3月24日（土）14:00～15:30

〔会場〕 高島屋グループ本社ビル8階ホール

都市論の第一人者・吉見俊哉氏が、百貨店の起源を解き明かします。時は19世紀末。アジアとの交易が盛んになったヨーロッパでは万国博覧会が誕生。物品を一堂に集め陳列する世界規模の催しが続々開催されましたが、そこに百貨店のルーツがある!? 近現代の150年を一気に駆け抜けながら、都市文化の発信装置・百貨店の進化をたどります。



吉見俊哉（よしみ しゅんや）／社会学者・東京大学大学院情報学環教授

1957年東京都生まれ。1976年東京大学教養学部理科I類に入学、同大学関連社会科学分科に転科し1981年に卒業。1987年同大学院社会学研究科社会学専攻博士課程単位取得退学。東京大学新聞研究所助手、助教授、同社会情報研究所教授を経て、現職。社会学・文化研究・メディア研究専攻。主な著書に『都市のドラマトゥルギー』（弘文堂、1987年）、『博覧会の政治学——まなざしの近代』（中央公論社、1992年）、『大学とは何か』（岩波書店、2011年）、『「文系学部廃止」の衝撃』（集英社、2016年）など多数。

博覧会が百貨店へと進化した



百貨店が現在のような発展を遂げた背景には、万国博覧会があります。博覧会文化が百貨店に導入され、都市に広がっていったのですが、これをお話する前に高島屋と万博の深いつながりについて、ご紹介したいと思います。1900（明治33）年に開催されたパリ万博では、アールヌーヴォーという様式が一世を風靡し、「動く歩道」が会場に設置され、映画が撮影されるなど新しいものが満載でした。しかもオリンピックも同時開催。というのも、このころのオリンピックは万博の一大アトラクションのような位置づけだったのです。今、オリンピックで授与される金、銀、銅のメダルは、元々は、万博の賞の仕組みを取り入れたものです。オリンピックの原点は万博にあると言えます。

高島屋はパリ万博に美術作品を出品していました。当時ジャポニズムが人気を博し、高島屋のコーナーにも多くの客が集まっていたのですが、なかにピロードの大壁掛「波に千鳥」という作品がありました。それをフランスの大女優サラ・ベルナルが気に入って、会期中でしたが、彼女の自宅に飾ることになったそうです。高島屋はベルナルの御用達として名を馳せることとなりました。

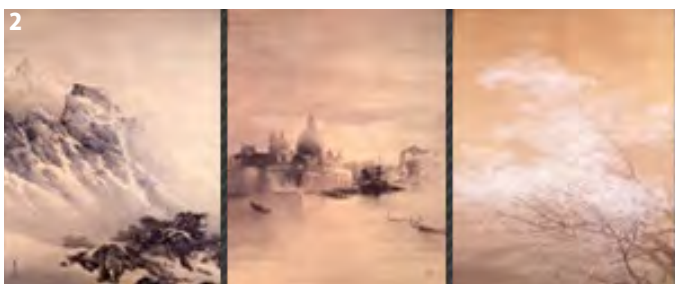
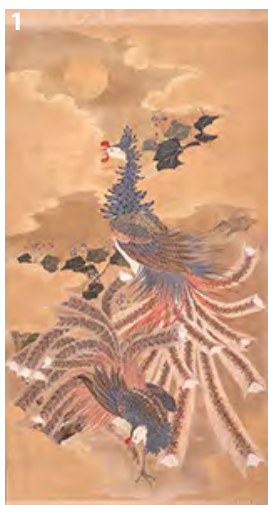


1. 1900（明治33）年、第5回パリ万博シャン・ド・マルス全景

【転載元：国立国会図書館電子展示会「博覧会——近代技術の展示場」】

2. 竹内栖鳳（図案）「波に千鳥（ピロード友禅下絵）」[所蔵：高島屋史料館]

高島屋は、パリ万博以前、1888（明治21）年バルセロナ万博（刺繍作品）、1889（明治22）年パリ万博、1893（明治26）年シカゴ万博（屏風、大壁掛等の大型の美術品）にも出品しています。パリ万博の「日光陽明門」「雪中鴛鴦図」「叢菊鶏図」、1904（明治37）年セントルイス万博の壁掛や刺繍額では金牌を受賞し、1910（明治43）年ロンドン日英博では、高島屋独自でパビリオンを開設したほどです。日本国内でも京都や上野などで開催された博覧会に出品するなど、熱心に参加しています。殖産興業の政策下にあつて、博覧会に出品できるような作品をつくって評価されることは非常に重要なことでした。



1. 村上嘉兵衛（友禅）、岸竹堂（下絵）「旭陽桐花鳳凰図」

〔所蔵：高島屋史料館〕

2. 山元春挙、竹内栖鳳、都路華香「世界三景」〔所蔵：同上〕

高島屋のみならず、世界でも百貨店文化と博覧会は非常に密接な関わりがあります。最初に万国博覧会が開催されたのは、1851（嘉永4）年のロンドンです。クリスタルパレスという大きなパビリオンが建設され、そこに世界中の産物が一堂に展示されました。その後1855（安政2）年にパリ、1862（文久2）年ロンドン、1867（慶応3）年パリ、1873（明治6）年ウイーン、1878（明治11）年パリ……。19世紀の後半には競うようにヨーロッパ各都市で巨大な規模の博覧会が開かれていました。

そして、博覧会的な製品を展示する仕組みを都市のなかに日常的に取り入れていく空間、装置として誕生したのが百貨店と言えるでしょう。実際、世界最初の百貨店と言われているパリのボンマルシェは1852（嘉永5）年にオープンしました。その後パリでは、「Les magasins de Nouveates」、つまり「新しいものを集めた店＝百貨店」として、1855（安政2）年にルーブル、1865（慶応元）年にプランタン、1869（明治2）年にサマリテーヌといった、今に続く老舗百貨店のオープンが続きます。

百貨店以前の商店は、商品が展示されておらず、店員が客に「これこれの商品が欲しい」と言われて、棚から持ってくる仕組みでした。しかし百貨店では博覧会のように、商品をみな展示して、客に見せるようになりました。加えて、定価販売、低価格、返品可、広告、郵送注文可、バーゲンセール……といった、今では当たり前となっている百貨店の原型ができてきたのです。このスタイルはやがてアメリカにも広がっていきます。

「まなざしの空間」の誕生

博覧会や百貨店という空間には、17、18世紀までにはなかった共通の特徴があります。近代的な都市空間の特徴の一つ「まなざし」です。18、19世紀にかけて、「見る」ことが重要な意味をもつ空間がたくさん誕生しています。看守がすべての監房を見渡せるようなパノプティコン型の監獄や、オスマン男爵が都市改造をして街を一望できる空間となったパリもそうです。不穏な動きがすぐに察知できるからです。博物館、百貨店、動物園、あるいは、エッフェル塔のような高い建造物が生まれます。

ヨーロッパに誕生したこのような「まなざしの空間」は、文明開化のあと、日本にも入ってきます。1872（明治5）年、東京を占拠した明治政府は銀座煉瓦街をつくりました。銀座煉瓦街の新しさは、街を見渡せるというところにあります。ここを描いた当時の錦絵には、煉瓦の街並みの奥に、蒸気機関車、さらに海が見え、西洋から来たであろう帆船がいくつも浮かぶ風景が描かれています。銀座の向こうには鉄道の起点である新橋、さらに新橋から鉄道でつながった横浜の海、その向こうには西洋が見えているのです。遠くまで見渡せる街というのがいかに新しい経験であったか、さらには当時の人がそこに何を見ようとしていたのかがわかるのです。東京駅は、また違ったまなざしの空間です。今、東京駅には八重洲口と丸の内口がありますが、1914（大正3）年の建設当時、八重洲口はありませんでした。丸の内口の向こうには、行幸通りが位置し、その先には皇居があります。つまり、東京駅はまず天皇のための駅であり、東京駅で乗降することは、すなわち皇居を仰ぎ見ることとイコールになる関係が、東京駅の建築空間のなかにセットされていたのです。このように、近代都市において、人々の視線をコントロールするというのは極めて重要な空間の役割だったと言えるのです。



1. 二世歌川国輝画「東京銀座要路煉瓦石造真図」〔所蔵：都立中央図書館特別文庫室〕

2. 東京駅丸の内口の写真〔出典：黒田鵬心編『東京百建築』建築画報社、1915年〕

先述したように、博覧会は近代のまなざしの空間を具体化したもので、そのような「まなざしの組織化」を集中的に行う場として、都市のなかで広く開催されたのです。銀座の煉瓦街を整備したあと、明治政府は、1877（明治10）年、西南戦争が起こった年に上野で、最初の内国勸業博覧会を行い、43万人を集めました。その後、1881（明治14）年、1890（明治23）年と三回行い、1890（明治23）年の博覧会は100万人くらいの人が集まりました。この内国勸業博覧会では、見物人が集まっただけでなく、展示するさまざまな物産を全国から集め、ヨーロッパの博覧会にならって生地、鉱産物などといった産物をジャンルごとに県別に展示し、比較できるような視覚的空間をつくっていきました。

こうした近代を象徴するような空間を上野につくったことには大きな狙いがあります。上野は江戸幕府にとって聖地と言っても良い場所でした。寛永寺は徳川家の菩提寺で、吉宗、綱吉など徳川家の将軍たちは、皆、寛永寺に葬られています。当代の将軍が日光までは行かれなくても上野までなら、と墓参りに行く場所だったのです。今は3万坪ほどだそうです。当時は30万坪の境内地を誇り、上野一帯はほとんど寛永寺と言っても良いほどでした。幕末には江戸城を明け渡したあと、彰義隊の残党が上野に立てこもって薩長軍と戦い敗れています。上野とはそういう場所なのです。そこで明治政府は、寛永寺が焼け野原になったあと、上野に最も近代的なもの、つまり勸業博覧会をもち込み、この地から徳川家の記憶を消そうとしました。最初に博覧会が開催されたのは、今美術館や博物館のある場所でしたが、明治、大正を通じて規模がどんどん拡大し、やがて不忍池の周りにパビリオンが建ち、グライダーの初飛行をお披露目したり、競馬やマラソンといった競技が行われ、夜になるとイルミネーションが灯るといった華やかな空間に変貌していきます。



1. 河鍋暁斎「東京名所之内 明治十年上野公園地内国勸業博覧会開場之図」
〔所蔵：都立中央図書館特別文庫室〕
2. 東京勸業博覧会のイルミネーション写真〔出典：高木秀太郎著『第五回内国勸業博覧会』
関西写真製版印刷出版部、1903年〕

まなざしの空間が百貨店に

まなざしの空間だった上野の博覧会は、次に「勤工場（かんこうば）」というかたちで日常の空間へと転換していきます。勤工場は博覧会で売れ残ったものを販売するという、百貨店の原型のような場で、新橋から銀座にかけての地域に集中してつくられていきました。新橋は東京の周縁という場所柄、また横浜からの西洋的な文化が東京のなかで最初に入ってくる場所だったからだろうと思います。この高島屋のある日本橋は、三井呉服店、白木屋などの大店があり、江戸の商業の中心という伝統的な場所だったので、新しい、まなざしの文化が浸透するには多少の時間を要しましたが、1900（明治33）年に入るとこれらの呉服店も近代的な空間に変身して、新しい「まなざし」の空間を取り入れるようになります。



芝公園内の勤工場 [出典：『東京景色写真版』江木商店、1893年?]

象徴的な出来事が、1904（明治37）年、三越（旧、三井呉服店）のデパートメントストア宣言です。三越は、もう呉服店ではなく西洋的なデパートメントストア、つまり百貨店に変わるんだと言うのです。そうなるからには展示販売をし、多くのジャンル、多くの商品を扱い、女性店員を雇い、バーゲンセールをし、さらに博覧会で行われていたことを「こども博覧会」や、店内の美術展といったかたちで取り入れ、建築としても新しい空間をつくっていったのです。一方、高島屋は、万博や国内の博覧会に盛んに出品していたことを背景に、金牌など海外で賞をとったものをブランド化し、商品を展開していくという戦略を取っていました。

三越は、「毎日が博覧会」を演出する「まなざしの空間」を、屋上や、周辺の空き地まで使ってパビリオンのつくりあげていきます。「こども博覧会」は、その代表的な例です。三越が強調したのは、こども博覧会は子どもにとって良い商品が展示され、販売されている場であるということです。体育館では、子ども用の三輪車、ブランコ、乳母車、ハンモック、教育館では玩具のオルガン、アコーディオン、ブリキ製の筆箱、絵の具箱、折り紙人形、服飾館では改良服、水兵服、髷付きの帽子、工芸館では玩具時計、三味線、草履袋、ティーセット、汽車模型、軍艦模型といったものを展示、販売しました。このこども博覧会のパビリオンの一つに音楽堂をつくり、1912（大正元）年に大阪三越少年音楽隊を組織しました。人気を博し、他の百貨店もこれに続きます。京都大丸では少年音楽隊、いとう呉服店（松坂屋）は少年音楽隊を組織し、これは後の東京フィルハーモニーとなって現在も活躍しています。三越が少年ならこちらは少女で、ということで白木屋で

は少女音楽隊を結成します。阪急が結成した宝塚少女歌劇団はご存じのように、現在の宝塚の前身となっています。

こうして花開いた百貨店文化は、都市生活そのものに重要な役割を果たします。百貨店のポスターは広告戦略の重要なツールですが、明治の末くらいまでは和服の女性が中央に配置されメインキャラクターとなっていました。しかし大正期になると「今日は帝劇、明日は三越」といったコピーが登場し、観劇などの文化を楽しむモダンな東京のなかに百貨店を位置づけようという意図が表れています。ポスターには美人画とともに百貨店の建物が登場するようになります。実際、時代が進むにつれ、百貨店は最もモダンな建築になっていきます。



1. 明治末期の広告〔所蔵：高島屋史料館〕
2. 1933（昭和8）年の広告。東京日本橋店（現、日本橋高島屋）開店告知ポスター〔所蔵：同上〕
3. 1935（昭和10）年広告。大阪南海店全館完成3周年記念夏の百貨祭ポスター〔所蔵：同上〕
4. 1914～1915（大正3～4）年頃の広告。キャッチコピー「今日は帝劇、明日は三越」は、当時三越で広告を担当していた濱田四郎によって制作された〔所蔵：株式会社三越伊勢丹〕

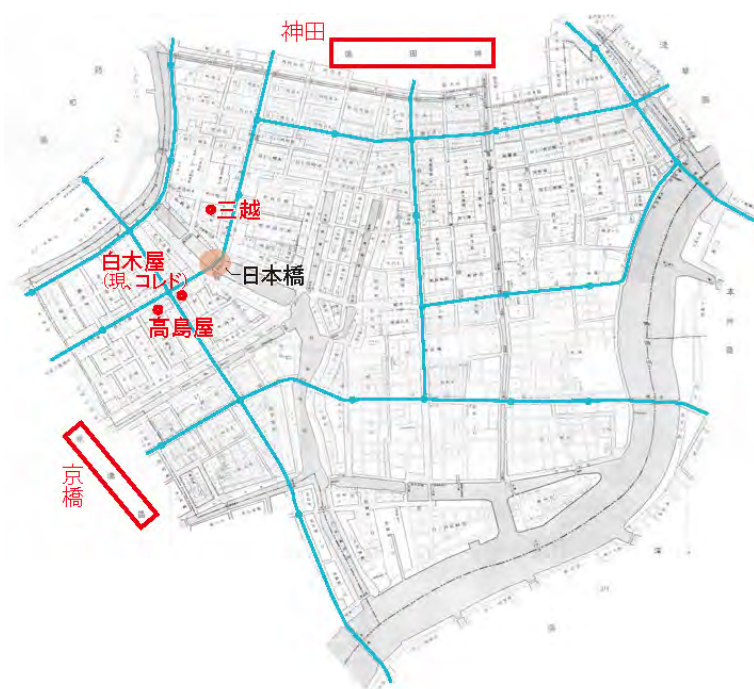
東京の文化と百貨店

ほとんどの百貨店が日本橋、上野といった都心の中でも北東部からスタートしています。したがって東京の百貨店文化を考えるとときには、この日本橋、上野の一带が最も重要なのです。

百貨店の街としての日本橋・神田・上野（カッコ内竣工年）

高島屋	日本橋 (1900年)		
白木屋	日本橋 (1662年)		
三越	日本橋 (1673年)	銀座 (1930年)	新宿 (1929年)
大丸	日本橋 (1743~1910年)		
松坂屋	上野 (1768年)	銀座 (1924年)	
伊勢丹	神田 (1886~1933年)		新宿 (1933年)
松屋	神田 (1776年)	銀座 (1925年)	浅草 (1931年)

当時の地図と照らし合わせてみます。日本橋をはさんで、高島屋、白木屋、三越と三つの百貨店があります。水色の線は、路面電車を示し、百貨店が並んでいるのは神田と京橋にはさまれた地域です。当時の日本橋を描いた錦絵を年代順に見てみましょう。日本橋は、江戸から明治の始めまでは木製、1911（明治44）年に石造になります。時代が新しくなるにつれ、人力車や馬車、自転車、路面電車といった新しい交通機関が増えています。日本橋の北には、当時の神田区が広がっています。明治の東京市の行政区は15区で京橋区、日本橋区、神田区、下谷区などとなっていますが、それを南北に結ぶ軸、江戸町人文化の中心軸に沿って高島屋、三越、白木屋、松屋、伊勢丹などといった百貨店があったということなのです。



旧日本橋区地図 [下図出典:『商業大地圖 東京市日本橋区』萬國製圖協會、1913年]



1. 歌川芳虎画、蔦屋吉蔵版「東京日本橋風景」1870年
2. 1920（大正9）年頃の日本橋——「日本橋 Nihonbashi Bridge」〔所蔵：都立中央図書館〕
3. 現在の日本橋



1. 旧神田区地図〔下図出典：『商業大地圖 東京市神田区』萬國製圖協會、1913年〕
2. 明治時代の東京市15区の百貨店分布

先述したように、上野も明治時代は非常に賑わいのある場所でした。この上野から銀座までつないでいたのが路面電車です。百貨店が点在する上野から銀座、新橋、浅草など都心北東部には、路面電車のネットワークが縦横に巡らされ、まとまった地域を形成していました。



1. 明治時代の上野広小路 [出典：『東京風景』 小川一真出版部、1911年]
2. 明治時代の上野広小路 [出典：瀨川光行編 『日本之名勝』 史伝編纂所、1900年]
3. 「銀座通り Ginza street」——銀座を走る路面電車 [所蔵：都立中央図書館]
4. 「南伝馬町より日本橋通を望む A view of Minamitenmacho (Great Tokyo)」——日本橋通りを走る路面電車 [所蔵：同上]



東京の破壊と再生——東京文化資源区の挑戦

ここまでお話してきたような都市文化は、言ってみればオールド東京の文化です。しかし1960年代の高度経済成長を契機に、昔の東京は大きく破壊されてしまったと言わざるを得ません。1964(昭和39)年の東京オリンピックを開催するために、スピードをもった都市に改造しなくてはならないということになりました。この改造を代表しているのが、1963(昭和38)年の首都高速道路建設です。日本橋の上に首都高速道路が建設され、景観は台無しになりましたが、それだけでなく多くの場所で川をつぶして首都高ができました。古い風景、東京の文化はこの時に相当のダメージを受けました。

では、私たちはこのまま、高度経済成長以前の東京の文化、風景を忘れていいのかというと、そうではないだろうと私は思っています。そこで、私が数多くの多方面で活躍している仲間と掲げているのが、「東京文化資源区構想」です。

1960年代の首都改造を経て東京の文化の中心は、日本橋から上野にかけての
一帯から、六本木、赤坂、青山、原宿、渋谷などの港区から渋谷区にかけての都心
南西部一帯に移動しました。しかしながら、21世紀初頭、これを多少でも都心
北東部に呼び戻そうというムーブメントを起こしています。

今、文化の中心となっている六本木、原宿、渋谷をつなぐ青山通りは、国道
246で、明治、大正といった戦前には軍事的に重要な道路でした。この道路沿い
に日本軍のさまざまな施設があり、アジア太平洋戦争以前は、日比谷、青山、代々
木、世田谷から相模原までがつながる日本軍の基幹道路だったのです。敗戦後、
日本軍の施設は米軍に接收され、東京は米軍の街になっていきます。米軍施設の
並ぶ東京都心には、米軍の文化が花開いていったのです。そのような土地が日本
に返還されたあとは、公共施設になりました。1964（昭和39）年の東京オリンピッ
クのために建設された代々木の国立競技場は、米軍の兵舎・家族用居住宿舍など
が集まった軍用地ワシントンハイツの跡地です。ここには、日本軍、米軍、オリ
ンピックが一直線につながった文化があったのです。

しかし、東京の街としての魅力は、これだけではないのではないのでしょうか。
江戸時代までの東京、アジアとつながる、東京の歴史的・文化的資源は北東部に
あるというのが、私の考えです。江戸の文化は、国内版コスモポリタンです。確
かに鎖国してはいましたが、参勤交代によって加賀、津軽、薩摩など諸藩の文化
が流入し、東京に集まっていました。また蘭学ネットワークも生まれ、日清戦争
後は、五万人という中国からの留学生が神保町中心に集まっていました。西洋の
文化を東京で学んだ留学生には、孫文、周恩来、魯迅がいます。また北東部は近
代学芸の原点でもあり、帝大から私大までが集中して学生街が形成されていまし
た。

こうした文化的な空間を「東京文化資源区」として、私はいろいろなプロジェ
クトを展開しています。その一つの活動が都心に路面電車を復活させることです。
先の百貨店文化にも登場したように、路面電車は時速10～15kmで、乗車して
いる人が街の風景を楽しみ、街と会話をすることができます。路面電車は、バリ
アフリーで外国人観光客にもわかりやすく、スローモビリティとして世界的にも
注目されています。



循環型社会と高島屋の未来

話が突然大きくなってしまいますが、都市の風景を考える上で、歴史はどこへ行くのかを考えたいと思います。今、社会は成長型から循環型の社会に変換している過渡期にあります。改めて言うまでもありませんが、平成の時代は、失われた30年と言われ、日本はグローバル化についていけませんでした。インターネットが広まり、情報化社会が訪れ、その変化の波に上手に乗った人と、ついていけない人の格差が拡大しました。すでに日本は総中流化社会ではなく、階級社会と言える状況も見えてきています。少子高齢化に回復の目処は立たず、超高齢化社会は続くでしょう。

つまり、私たちは近代という大きな時代の終わりにいるということなのです。18世紀末に始まった近代という時代がどのような時代かというと、産業革命の時代です。これによって世界は大きく変わりました。人類の生産力は上がりましたが、地球という有限な環境を越えることはできないのです。1970年代、ヨーロッパは成長の終わりを迎え、1990（明治33）年以降の日本ももう飽和点に達しています。先進国は「発展」という事象それ自体がもっている問題に苦しみ始めるのです。かつての高度成長期のような時代は、もう二度と来ないからです。

大量生産、大量消費、という時代が続かないことがわかった今、つくったものをリサイクルするということになりませんが、これはたとえばペットボトルや新聞という「物質」だけでなく、文化的資源、人材、知識なども同様です。これらもリサイクルしていくことで価値を生んでいく社会に変わっていかなくてはなりません。

もう少し長期的に捉えると、成長型から循環型へ、社会が変わっていくということは、価値の時間軸が変わっていくことを意味しています。成長型の社会は、未来に向かって右肩上がり一直線に進歩する、発展する社会でした。新しいものをどんどんつくって消費していく、これによって利益が上がっていくという社会でした。このような社会が破綻することが見えてきているのです。

循環型の社会においては、過去と未来を行き来するようならせん構造をもつ時間軸が生まれてきます。古いものが新しくなる、古いものを常に新しくしていくことから価値が生まれてくるのです。今、そういう動きが東京のような都市で広がっていると感じます。たとえば湯島、蔵前などでは、古い木造の建物を洒落たカフェ、レストラン、バーなどの心地良い空間に改造して、渋谷などの南西部とは違う魅力があります。記録映画のフィルムや過去の番組の映像、古い資料などをデジタル化してアーカイブ、再利用するという動きも同様の現象と言えます。

このような循環型の社会において、百貨店はどう変わり得るのでしょうか？先にお話したように、老舗の百貨店は、人材、建築、ブランド、など循環する資源をたくさんもっているのです。これを活かしていくことが、今後非常に重要なのです。「古いからこそ、新しい」——そのような価値を生み出すことが百貨店には可能なのではないかと、思います。

対談＝吉見俊哉×松隈 洋 都市文化の未来を考える

体のなかに地理を取り戻す

松隈 | 吉見先生、ありがとうございました。路面電車のお話は非常に印象的でした。地上の建物、街と路面電車の駅は、私たちに都市の記憶を残しましたが、地下鉄が整備されたことによって、私たちは地上レベルの東京を記憶できなくなっていると思います。

吉見 | 駅から地下に入ってしまうと、地上がどうなっているかわからないし、気にしなくなってしまう。でも路面電車なら、こんな建物があったという街の変化が見られる。街も見られることで人々の視線を意識します。街に住む人と街並みのインタラクションは都市がつくられていく上で、すごく重要な要素なのです。

松隈 | 広島、岡山などの路面電車は、道路のど真ん中を走りますから、それに乗っているだけで「あ、次の角を曲がると百貨店が見えるな」と視覚的に都市を記憶していくことができます。街をすべて体験できるのです。

吉見 | 百貨店は街の風景のシンボルになっていた時代がありましたよね。ですが今は、地下から入って買い物をしてしまうから、建物が街のシンボルという意識がなくなりますよね。

松隈 | 私は、2000（平成12）年に大学に着任した直後は通勤に地下鉄を使っていました。郊外の駅から地下鉄に乗って大学の近くの駅でぽっと地上に出る。遅くまで仕事をして、また地下鉄に乗って家に帰るということを繰り返すうちに、「まるで、もぐらのようだ」と生活にフラストレーションが溜まり、ときには鴨川沿いを歩いて帰ることもありました（笑）。地下鉄で移動しても街を覚えられないのです。

吉見 | 路面電車移動するなら、自分の体のなかに地理学を取り戻すことができるかもしれません。街は、有機的なつながりをもっているものとして経験されないと。個別のもの、要素が部分的に残っていても、それは要素でしかないんです。都市の面白さは、それがつながりあって一つの全体をつくっているところであって、それをどう取り戻すかを考えなくてはいけない。ですから高島屋のこの建物を残すというのも出発点ですし、他にも周辺にたくさんの老舗が残っている。それをつないで古いものを息づかせていくことが本当は一番新しい。

古いからこそ、新しい

松隈 | 日本橋高島屋における村野の増築の仕事はモダンですが、しかし、村野は中央通り側の高橋貞太郎の仕事の歴史的な意味をきちんと理解する能力をももっていたわけです。だからこそ私たちは、高島屋の建物を見るとモダンな文化と同時に、1933（昭和8）年にできた時の高島屋を体験できる、それが日本橋高島屋の独自性という気がします。まさに「古いからこそ、新しい」というコンセプトを具現化しているのではないのでしょうか。

実際、今の建築の学生の意識も変わってきました。端的な例では、卒業設計に取り組む時、それまで気付かなかった、捨て置かれているようなものに手を入れて生き活きと蘇らせるリノベーションに興味をもつ学生が増えました。彼らの感覚では、更地に新築をつくることは、むしろ古いのではないのでしょうか。

吉見 | 若い人たちのほうが、時間の意識が変わっているんですね。1960年代は、新しいことが良いこと、未来には新しいものが生まれるという時代でしたが、今は、前へ、前へ進もうという時間軸ではなくなっているのです。これを発展しなくなったとか、経済的に厳しいという言われ方もしますが、先へ先へという価値観でない、違う価値のを見つけ方があるんだということに若い人が気づき始めているということですね。これは希望ですね。

松隈 | 私の研究室の卒業生の一人は古いマンションを買って、天井を剥きだしにして住んでいるというのです。楽しみ方が前のめりではなくなっている気がします。何度でも噛み締めて生まれる楽しさのほうが良いな、という感覚なのでしょう。この感覚は、古いからこそ新しいというコンセプトにつながる。私は、大学で近代建築史を教えています、「新しい過去と懐かしい未来」というテーマが大事になるのではないかと話しています。それは、過去を今まで見ていたような目で見ず、もっと新しいものがあるよねという目で見ようということです。学生の感覚のなかには、新しいなかに懐かしいものがないと、ぼくたちは説得されないという感性が生まれている。そういう意味で、日本橋を動いていない高島



屋は、歴史の蓄積された場所をもっているということになりますね。大きな財産ですね。

吉見 | 天井を剥きだしにしようとはがしたときに、古いけれど何かクオリティの良いものが見えてくるとすごく良いですね。反対にみずばらしいものが出てくるとちょっと悲しい。とすると、日本橋、上野の地域は、江戸時代から発展して街の形成をしてきた歴史があるので、この地域は剥がすと何重にもなっていて、じゃあ二枚はがそう、三枚はがしてみるかな、という楽しさもあります。そういう歴史もとても大切で、この地域は東京のなかでそういうポテンシャルをもっている。単に古いというだけでなく、過去を経た未来へののびしろがある地域なんです。新しさの元は、古いもののなかにあるんです。

松隈 | 昔のものが残っていても、たとえば印刷媒体なら、今、残っているものは、当時に見ていたものより色褪せてしまっていて情報が減っているかもしれません。でも、吉見先生が携わっておられるデジタルアーカイブなどは、そういう部分を補完して、たとえばモノクロをカラーに変換するなど、今の技術によって昔のものを蘇らせることができる時代になりました。

吉見 | テクノロジーは使ったほうがいいですね。昔のものをそのまま保存するのが必ずしも良いとは限りません。今の技術とつなぎながら蘇らせるというやり方で可能性が広がっていくでしょう。たとえば路面電車でも、今なら蓄電池を利用すれば架線は不要。あとは中間的な速度で走れる道路の整備ですね。そうした多様性も大切。

長い目で見ると

松隈 | 近代建築の保存を提唱している立場からすると、基本的には残して欲しい、という方向になってしまうのですが、そこには、今の価値だけで決めず、もう少し残しておけば、面白いカタチで活かせるかもしれませんよ、判断の速度を落としませんかという意図があるんです。少なくとも何十年間ここにあったものを、今の経済合理性だけで、すぐに建て替える、捨てるというのは、あまりにももったいない。今からは減速したほうがいいのではないかと、思っているんです。

吉見 | 経済合理性が怪しいのは、それを訴える人のもつ時間のスパンが短すぎる場所です。ある種の価値、利益を生まなくてはいけないのは理解できますが、すべてのものが一年以内、三年以内に答えを出せ、という発想には無理なことがたくさんあります。

今、大学の学科で文系は不要だという議論があります。僕は、文系は絶対に必要だと訴えているのですが、文系が役立つことがわかるのは30年、50年のスパンで見なくては結果は出ないとも言っています。長いスパンで見れば、建物にしても過去の資産にしても、未来のために、非常に価値があるということを主張することはできるのですが、30年、50年と一定の時間が必要です。そろそろ私た

ちは、それほどの時間をもって物事の価値を見定めるということができる余裕、認識の豊かさを、もってもいいのではないかと思います。

松隈 | 私は、この国が「ばくち国家」みたいになっていくのではないかと、思っ
て仕方がないのですが、そうではなく、ゆっくりと価値を貯めていく、という時
代に変わらないといけないと思います。

吉見 | ばくちもバブルも似たようなところがあって、非常に短期的に利益を上げ
る人と、その割を食ってものすごく悲惨な人が出てくる、そんな社会は、私た
ちの未来にとって良い社会なんでしょうか、と問いたいですね。もっと長期的に
緩やかに社会がリデザインされていくようなかたちを考えるためには、もっと緩
やかな時間を楽しむことができる社会、都市をつくっていく、そのために適切な
交通手段、建築、建築の保存方法、教育の仕組みを考えていくのが平成最後の年
の課題という気がします。

60～80年代を再評価する 見いだすべき価値／捨てるべき成功体験

松隈 | 来年2020（令和2）年は東京オリンピック・パラリンピック、2025（令和7）
年には大阪万博、という相変わらず60年代モデルを使っているんですね。でも、
高島屋は、博覧会の価値を日常に展開してブランド化している。今はむしろ、価
値のあるものを長く使おうという時代なんです。

吉見 | 若い人たちの価値は変わってきている。しかし1964（昭和39）年のオリ
ンピック、1970（昭和45）年の万博の成功体験に固執せず、60年代とは違う価値を
社会の軸にきちんと据えていくということが必要なんじゃないかと思います。

松隈 | 大河ドラマ「いだてん」を見ていて悲しくなったのは、日本人が初めて競
技に参加したオリンピック会場のストックホルムのスタジアムは、まだ使われて
いるんです。日本はどうでしょうか？という問題なんです。

吉見 | 残すこと、再活用するということはとても新しいことだ、ということ
を再認識しなくてははいけません。60～80年代は多くの人がそれに価値があるとは
思っていなかったかもしれませんが、今は、そこにこそ価値があると実感してい
る人が増えているはずです。それを国レベル、都道府県レベルで実現するなら賛
成できますが、認識を改めないままに、もう一回60年代と同様の成功を、とい
う話には賛成しがたいということですね。

松隈 | 皆が、目の前にあるものを楽しみながら使える平等性というか、格差社会
でなく、人間のもつエネルギーの総和は変わらないと思うので、そこに変な歪み
や誰かが不幸な状態があるというのは、困りますよね。

吉見 | 高度成長期なら、パイそのものが大きくなっていくから、大きくなった分を平等に分配することができました。だから格差社会は生まれなかったんです。しかし、そういう時代はバブル崩壊とともに終わりました。もうパイは大きくなりません。するとゼロサムゲームになって、ある人だけがどんどん膨らみ、ある人は小さくなるという非常に厳しいことになるのです。そういう社会に、私たちはどう対処するのか？ ですから全体としてそれなりの統合性、協調性、ある種のコミュニティを維持し、街の豊かさを維持するためには、発展だけ、成長だけが価値ではないという認識を皆が共有していくことがとても重要です。

松隈 | 今、後継者がいなくて地方の伝統産業がつぶれてしまうという状況にあって、若い人がそこに入って、地元産業を別の視点からデザインするということが少しずつ起きているようで、今が瀬戸際、大事な踏ん張りどころかなという気がしています。

吉見 | 若い世代がいろいろな動きを起こしているというのは、とても面白いと思いますね。